

府中かんきょう市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報
2009年 秋号 11月11日発行/季刊
発行人：竹内 章
連絡先：府中市分梅町 1-20-3
TEL 042-364-3428

府中市では、2000年8月に50人を超える公募市民の参加によって「府中市環境基本計画」の議論が始まり、足かけ3年の検討を経てまとめられた「計画」は2003年1月に市長に答申され、市および企業や市民が取り組むべき環境問題の課題が明らかにされました。これは市民の市政参画という点でも画期的な事柄でした。続いて、この「計画」推進のために2013年度までの10年間の「府中市環境行動指針」が策定され、「計画」推進体制と重点施策10項目などが決められました。これに基づく市行政や市民、各企業での取り組みの促進が期待されています。

当会としても、「計画」と「行動指針」に沿って活動することが求められていることは当然です。ほぼ中間点を経過した今日の時点で、府中の環境問題の取り組みは、どのように受け止められ、またどのように進んでいるのか、そして取り組みが停滞ないし、遅れている分野についてその原因と打開策も探って行きたいと考えます。

今回とりあげるのは、「環境基本計画」重点施策8の「校庭の芝生化と学校のエコスクール化100%」を巡る課題です。

府中市の環境行動指針はどこまで進んでいるか…その1

始まった校庭の芝生化

10校を目標に始まった校庭芝生化

東京都主導による校庭芝生化は多摩地区でも今年度22市で合計31校で実施されます。そのうち府中市では2013年までに10校を芝生化する計画です。費用は全額東京都負担ですが、各学校とも維持管理体制が整っていることが条件となります。つまり芝の維持管理を児童・保護者・地域住民との協働で実施する仕組みを構築しなければならず、また芝生化の翌年から3年間、維持管理の状況と校庭の気温・湿度測定について報告が求められます。

芝生化は工事計画、本体及び付帯工事、芝刈り機の購入・百葉箱の設置工事など備品等購入費、専門業者による維持管理委託費が補助対象で(予算規模は1校あたり約6000万円)、市立第5小の場合、施工維持管理は、味の素スタジアムの芝生を手がけた実績を持つ「株式会社オフィスショー」(六本木)が担当しています。工期は6月から8月末までで、9月から第2学期の始業式にあわせて芝生化した校庭を使い始めました。

積極的な学校側の受け止め

市立2小と5小の校庭の芝生化は、都から急かされて着手したようですが、どちらの小学校とも校長が先頭に立って、児童、PTA、校庭を利用する野球やサッカーの父母をリードしています。

各校長は、「学校芝生化研究委員会」を立ち上げ(2小)。芝生化が地球温暖化防止など環境教育の「ナマ」の教科書の役割を果たしてくれる。そして子どもたちが季節の変化を身をもって感じてくれるのではないかと期待しています。また芝生の維持管理のためにポット苗にふれることで土に親しむチャンスを多く与えてくれる(5小)、などと期待しています。

サッカー出来るのかナー!

子どもたちも「サッカーが出来るのかナー!」、「思い切っで滑り込んでも良いのかナー!」と期待している様子が見えがえます。またグラウンドを駆け回りたくて仕方がない感じで、グラウンドを駆け回る子どもたちがいきいきのびのびしていたのは印象的です。キャッチボールをしていた親子の父親は「ボールのバウンドが以前と違うので慣れるのに時間がかかりそう」とも(5小)。2学期の始業式では約900人の子どもたちがしゃがみ込んで芝生をなでていました(2小)。<次頁へ>



校庭の芝生化が完成した5小のグラウンド

校庭にトンボがやって来た

2小では、敷きつめた芝生にトンボがやって来て、その後バッタなどの虫が来て、どこからとなくツバメが飛んできて虫たちをついばんでいる様子に、季節感、自然感を十分に感じているようでした。早朝の校庭には100羽ほどのムクドリが飛来もあり、学校のなかで自然が身近に感じられるようになりました(5小)。



新しい芝生の上でのびのび遊ぶ子どもたち(2小)

芝生の維持管理は今後の課題

芝生の維持管理で重要な「刈り込み」ですが、学校、PTA、野球とサッカーの指導者でつくる「学校芝生化研究委員会」で協議中です。野球やサッカーの指導者の熱意に期待している(2小)、教育の一環としてPTAで打ち合わせている(5小)、といった状況です。

芝生は、青々と成長する春から秋までと、休眠期となる秋から春までで管理方法も異なるので、ふさわしい管理が求められます。ちなみに今回の場合、性質の異なる2種類の芝を張って通年の緑を保つようにしているそうです。また具体的には芝刈り作業車の購入も認められるので、管理方法について9月から管理業者と協議する予定です。

求められる市主導のエコスクール

府中市環境基本計画の項目として盛りこまれた「校庭芝生化」ですが、ともかく始まったのは全額を補助する都の呼びかけによるものでした(都の主管部局は環境局自然環境部緑環境課で、そのホームページ「校庭の芝生化」では通常の校庭と比較して芝生化後の夏の気温は8.3℃差が認められたとヒートアイランド現象に効果があることなどもPRしている)。

重点項目で目標にしている「エコスクール化100パーセント」という考え方ですが、そもそも「エコスクール化」とは何を指

すのか、これに関する計画や年次計画など不明確なのが現状で、市教委としては2013年までに校舎の耐震化工事を終わらせることが最優先され、エコスクール化までは手が回りかねるというのが現状です。校庭芝生化はこうした全体像が示されないまま都の事業の受け皿としてスタートしたわけで、府中市(市教委)としての独自の行政の計画化と取り組み推進が求められると思います。

環境基本計画の中間見直し

現在、府中市の「環境審議会」では2010年3月を目指して環境基本計画の中間見直しに取り組んでいます。見直し対象は、①省エネ・自然エネルギー利用・CO2削減(重点施策6)、②校庭芝生化などエコスクール化100%(重点施策8)、③市民の環境学習仕組み作り(重点施策9)、④市民・事業者・研究機関・行政とのパートナーシップ(重点施策10)の4項目に絞られ、どうしたわけか「水と緑のネットワーク保全拡充」、「馬場大門けやき並木など歴史的景観保全」など、重点施策10項目のうち他の6項目は手が付けられていません。これらの課題は今後、どのように取り扱われるのか、気になるところです。

学校のエコ
スクール化
100%

ちょっとちがうんじゃないの!?

森川貞夫(押立町在住)

もう何年前になりますか、私が初めて自分の住んでいる府中市で「街づくり」に関わったのは、いずれは終の棲家になるものという考えから何か地元で関わりをもちたいという気持ちで環境基本計画素案づくり検討委員会(長ったらしいネーミング!)の委員公募に応じて葉書を出しました。

まさか当たるとは思いませんでしたが、みごと(?)当選、それからが大変でした。毎週のように分科会と運営委員会、なんと2年間で延100回ぐらいの出席・参加でした。ある時は自転車で市内の「緑と水環境」視察にまわったりもしましたが、60名ぐらいのボランティア市民がお茶も出ないのによくまあがんばったものです。

私は「水と緑の分科会」でしたので当時としてはなんとか市内の公立学校の校庭芝生化など、「学校のエコスクール化100%」案などに夢中になりました。当初は多摩川河川敷のグラウンド使用など環境破壊もいいところだという「強硬な反対意見」などもあって校庭の芝生化などは「夢物語」という雰囲気でしたが、しばらくするうちに「環境や自然にやさしい」ことと市民の健康・スポーツ活動とは矛盾しないで「共生」することの必要が理解されてきました。

それからは「校庭の芝生(雑草)化」に力を入れましたが、その時の主張はあまりお金をかけないでやる、そのためには児童・生徒や保護者・住民ができるだけ自分達でやれること(例えば水やり・芝

刈りや植え付け・管理など)自分達でやろう、ということでした。

ですから「緑十字軍」なるボランティア集団なども育成しよう、芝の植え付けや維持管理も失敗してもそれはそれで子どもたちが学んでいく(ちょうどその頃に「総合学習の時間」が導入された)のに役立つから気にしないでやろう、などという意見が大勢を占めたと思います。

ところが今回あらためて市内の学校の芝生化予算を調べると、びっくり、中学校で2000万円、小学校でも4000万円、これでは1㎡(相場は2~3万円)いくらになるのだろう、鳥取方式(<http://www.bboselite.com/sibahutottorihousiki/>)だと1㎡100円という超低価額でできるというのに何という「無駄づかい」か、いやはや驚きました。

結局は市内の関連業者への手厚い保護につながる街路樹や緑化と同じだなあというのが率直な感想です。要するに、市民が自分達でできることは自分達でやる、その上で行政や企業ともパートナーシップを結んで協力したり支援されたりという「健全な市民社会」の形成につながる環境づくり(真の意味で「市民が主役」の)とはほど遠いのではないかと、そういう目で見ると、太陽光の利用や雨水の再利用とか、まだまだいろいろあるだろうけれど市民や子どもたち自身の創意工夫で環境づくりを進めるといったことはちょっとちがうのよね、というのが私の本音です。

草とり、かかしづくりも楽しい田んぼの学校

田植えから1ヶ月、7月4日(土)は草取り&水の中の虫取りを行いました。当日は小雨の降る中、生徒36名、保護者24名、スタッフの総勢79名の参加がありました。

稲をのびのびと大きく育てるためには、草取りはとても大事な農作業です。近年は、農家では除草剤をまくことが一般的になっていますが田んぼの学校では去年と同じく昔ながらの手押し除草機による作業を体験しました。



全身で体験する初めての「草取り」。税務署前の田んぼで

ちょっと引いてから押すといいんだ!

除草機は、子ども1人では思うように動かさない程の重さがありますが、小さい子どももスタッフや他の参加者と一緒に力を合わせて一所懸命に除草機を押してくれていました。除草機作業のほか、手取りの除草も行い、コナギやオモダカ、ウキクサ等の水草をとりました。ヒエ(雑草)もありましたが、まだイネとヒエの違いがよく分からず、あまりとれませんでした。

虫とりでは、タモを使って田んぼの中の虫をとりました。今年はウキクサが多く、タモで水をすくうと、ウキクサばかりがとれてしまい、虫をなかなか見つけられない状況でした。でも、田んぼならではの生き物、コムズムシやオタマジャクシ、アメンボ等がとれました。

子どもだけでなく、お母さん、お父さん方も、とても楽しそうに虫取りをしていたのが印象的でした。

“愛嬌のあるかわいい花”…イネの花観察

7月から8月はイネが大きく生長する時期で、日照不足による出穂・開花不良が気かりでしたが、8月8日はイネの花観察、イネにつく虫、かかし作りを行うことができました。

ずっと暑い日が続いていたので熱中症を心配しましたが当日はちょうどいい感じに雲がかかり、暑さを和らげてくれ、とても活動しやすい天候でした。参加人数は、生徒29名、保護者16名、スタッフほか19名の計64名でした。子どもたちが夏休み中だったためか、いつもより少ない参加でしたが、誰も事故やケガをすることなく、楽しく活動することができました。

イネの花の観察では、めったに見ることができないイネの花を、大人も子どももルーペを使って、興味深く観察していました。イネの花はとてもシンプルで小さな花ですがお米がパカッと割れたような形をしていて、よく見ると愛嬌のあるかわいい花でした。

イネの花の観察を終えたら、「かかしグループ」と「虫とりグループ」の2つに分かれて活動しました。

「かかしグループ」は3体のかかしを制作しました。田んぼの学校の開校時から、かかしプロジェクトメンバー(スタッフ)が積極的に参加者に呼びかけてくださっていたおかげで、沢山の古着が集まり、その組み合わせを楽しみながら、3体それぞれが個性的で、ユーモラスなかかしができました。大人や父母の参加者が大活躍されましたが、子どもも一所懸命にかかしの顔を描いてくれ、とてもかわいくできました。

<前頁より>



力作のかかしを囲んで ”ポーズ”。

「虫とりグループ」は、虫とり網やタモで、イネにつく虫や水路にいる生き物がしをしました。子どもたちはとても元気に、楽しそうに色んな生きものを見つけていました。見つけた生きものは、トウキョウダルマガエル、アブラゼミ、アキアカネ、シジミチョウ、カマキリ、ザリガニ、コムズムシ、イチモンジセセリ、ハイロゲンゴロウなどでした。最近ではなかなか見られなくなったトウキョウダルマガエルが23匹も見付き、都会の水田が生物の住処として、とても重要なのだということを実感しました。

また、見つけた生きものを図鑑で調べたり、顕微鏡で見たりしましたが、中には、図鑑にも載っていない小さな虫もたくさん見付きました。参加者同士でも「これはなんの虫だろうね」「その虫どこで見つけたの？」などと話し合い、交流を深めたようです。

第4回田んぼの学校は盛りだくさんの内容で、最後の参加者アンケートでは全員から「楽しかった」との評価を受けました。

次回はいよいよ稲刈りです。今年は初めて、もち米と古代米を植えてあるので、これからの稲刈り、収穫祭がどうなるかとても楽しみです。

(東京農工大学修士2年 佐藤しおり)



「何だかこわいよう」といった様子で用水に入った子ども達は慣れてくると親が心配するほど魚に夢中になってきます。

今年で8回目をむかえたこの催しも、今年は、8月1日に例年の猛暑とは違って変わって薄曇りのなかで行われました。

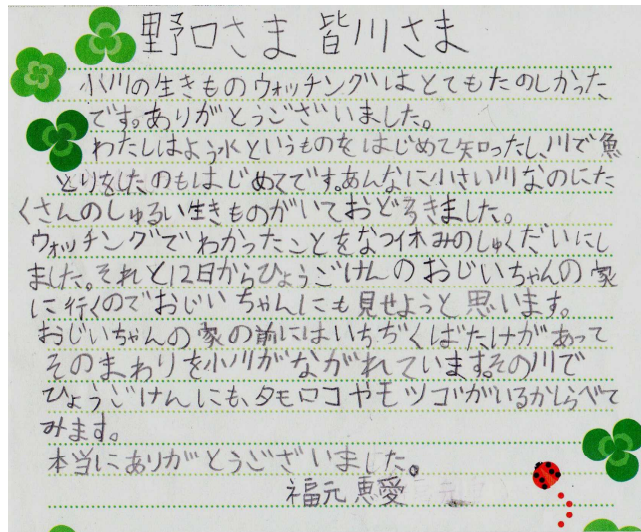
参加者は予定をオーバーして親子あわせて36人となり四谷の用水で皆川講師(東京農工大大学院卒)から、魚のとり方を教えてもらい、子ども達は待ちこがれたように用水に入りました。

数年前から多摩川からの取水がポンプアップ式に変わり、以前より魚の数も少なくなり、カタも小さいものが多かったのですが、今年とれた魚はオイカワ(19尾)、アブラハ

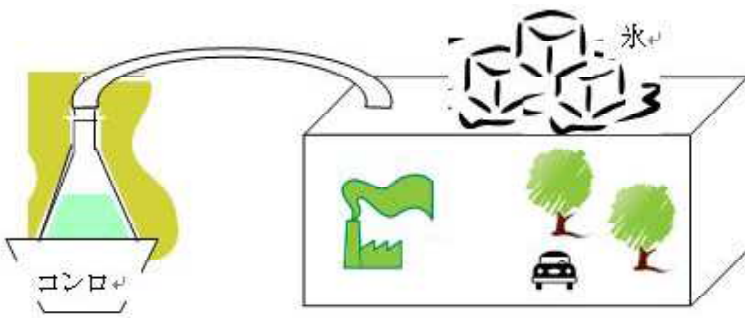
ヤ(20尾)、モツゴ(11尾)、その他(24尾)の合わせて74尾で珍しくメダカも1尾とれました。しかし多摩川ではオイカワが他の魚に比べ減っているようで心配です。

その後、昼食をとりながら皆川講師と阿部講師(多摩川水辺の楽校)の魚にまつわる話があり、皆川講師のスライドで映し出された魚の子と卵を線で結ぶクイズに子ども達は盛り上がりました。

参加者は「近くの川で楽しく参加できた」、「親も経験したことがないので、子どもが体験できてよかった」、「娘がどうしても家で魚を飼いたいということでチャレンジしてみます」との感想が寄せられた一方、「小学校低学年の子どもには、午後までのプログラムは長すぎ、午前中で終わるようにしてほしい」との意見もありました。来年は主なプログラムを午前中で終わり、昼食をとりながら魚の展示や説明など、改善を考えます。最後に小学校2年生の福元恵美ちゃんからのお手紙を紹介します。



エコ サマースクールに参加して



酸性雨実験装置
地球を想定した飼育箱の中には、工場や車や木の模型を入れた。

ました。農工大の原宏教授の指導と学生さんの協力で、小川の上流から下流まで5箇所の流水を取ってパックテストをしました。

また「かんきょう塾」の方々が教えてくださった「葉っぱプリント」は大人にも子どもにも大好評でした。

府中の大気は大丈夫？

今回は、環境資源科学科の伊豆田猛教授が酸性雨やオゾンについて、参加した小学生も理解できるようにスライドを使い、話してくださいました。

酸性雨や光化学スモッグは、車の排気ガスや工場の排煙から出る窒素酸化物や硫黄酸化物が原因で、酸性雨は大気中に漂うそれらの酸化物が雨に溶けて作られます。

光化学スモッグの人体への影響は、目がちかちかしたり、喉が痛くなったりするのですが、ひどい場合は呼吸困難や手足のしびれなどもおこします。また、酸性雨や光化学スモッグは、植物の生育に悪影響を与えます。多摩地域は光化学スモッグの発生が多い地域だという話をうかがってビックリしました。

伊豆田教授が大気汚染の植物への影響を研究されている施設や、農工大で見つかった絶滅危惧植物なども見学しました。

「はかるくん」で調べてみませんか？

エコサマースクールは、身近な環境に目を向けると、そこにはいろいろな発見があることに気づかせてくれた好企画でした。かんきょう市民の会でも「大気汚染調査」を2月に行っています。「はかるくん」という簡易測定キットを使用し、一時間空気にさらすだけで、その場で空気の汚染の度合いがわかります。家の周りや、学校、交通量の多い道路など「この空気はきれいかな？汚れているのかな？」と自分で確かめてみたい方は、2月初めの「広報ふちゅう」で参加者を募集しますので、ふるって応募してください。
(梅沢 みどり)

「今降っているのは酸性雨かな？」と少し気になったので「エコサマースクール 酸性雨調査」に参加しました。

エコサマースクールは、1回目は教育センター科学実験室で行なわれる「酸性雨を作ってみよう！」、2回目はバス見学会「多摩丘陵の自然を感じよう！」。そして3回目は農工大施設見学会「府中の大気は大丈夫？」の3本立。それらに参加した後、8月から9月の2ヶ月間、自宅で酸性雨調査をします。

酸性雨をつくってみよう！

教育センターに集まった参加者は、市民酸性雨調査の会の方々から「酸性雨はどうして降るのか」などについて簡単な説明を受けた後、パックテストの使い方を練習しました。

2種類の液体をパックの中に吸い込み、よく振ると、1つは黄色に、もう1つは青色に変化しました。その色を比色表で比べて、その数値が液体の水素イオン濃度(ペーハーpH)になります。pH7を基準に、それより低ければ酸性、高ければアルカリ性というわけです。ちなみに飲料水はpH7、酸性雨はpH5.6以下の場合をいいます。

今回は酸性雨を作る実験です。実験装置は、「ミニ地球」を想定した飼育箱と、「海」を想定した水の入ったフラスコです。フラスコは電気コンロにのせてあり、その口から伸びた管が飼育箱とつながっています。

フラスコの水を沸騰させて、水蒸気をいっぱい含んだ暖かい空気を飼育箱に送り込め、箱のふたの水が、温まった空気を冷やし、箱の内側に水滴が付きまします。

それが雨です。同じく箱の中に排気ガスを入れると酸性雨を降らせることができます。

駐車場でビニール袋に集めた排気ガスを箱の中に送り込み測定し、排気ガスを入れない場合と比較しました。結果は、排気ガス入れた時の雨のほうが、酸性度が高いことが示されました。

多摩丘陵の自然を感じよう！

八王子堀ノ内にある農工大フィールドミュージアム多摩丘陵に府中からバスで向いました。木立が鬱蒼と茂る丘陵は、山百合の白い花が所々に咲き乱れ、トンボが飛びかっている



ビニール袋に集めた排気ガスを箱に注入した。

横浜のエコキャンパスと日本庭園

10回目の バス見学会

9月24日(木)秋晴れの気持ちのいい朝、集まった会員と一般市民は総勢45名で大国魂神社の前を出発しました。

今年は「府中かんきょう市民の会」の10周年、そして

バスを使った環境学習会も10回目となりました。

今回は地球温暖化など地球環境問題と景観に配慮したまちづくりを学習の焦点にして、横浜のフェリス女子学院大学と三溪園を訪れました。

フェリス女子学院大学訪問

最初に訪れたのが横浜市泉区緑園都市のフェリス女子学院大学のエコキャンパスです。キャンパスに着いて一番に感じたことは、落ち着いていて静かで空気が澄んでいたことです。

エコキャンパスづくりを推進された本間前学長他3名の方に説明を聞き、施設を見学しました。本間先生は長年東京農工大学で研究をされていたそうで、府中ともかかわりの深い方でした。フェリスは文科系の女子学院大学ですが、文系女子大だからこそ出来る環境への取り組みは何かを考えながら、学内だけに限らず地域の方々と共に行動し足元の環境教育を重視しています。

最初にキャンパスの正面脇にある、「ハイブリット街路灯」を見学し、風車と太陽光との融合発電により街路灯を点灯しているとの説明を受けました。風力発電では「赤い風車のフェリス」の愛称を復活させた2.5kW規模の設備も稼動中です。

太陽エネルギーを電気エネルギーに変換する「太陽光発電」、体育館のシャワー温水利用のための「太陽温熱水器」、雨水の利用および循環のために地下に80トンの雨水タンクを設置。屋根に散水し、水の気化熱を利用して夏場に屋根を冷却する「屋根散水」などと新エネルギーの利用が進んでいます。

地中の温度は年間を通してほぼ一定なので、地下にチューブを埋設し、吸気口から入った空気は、夏には冷やされ、冬には暖められて体育館の空調に利用する「クール(ヒート)チューブ」、そして「屋上緑化」「壁面緑化」等など。さらに「ビオトープ」「生ゴミのコンポスト」「ソーラー・クッカー(太陽熱調理器)」などの設備を使って、環境に関する教育や啓発を行なっています。



フェリス女子学院大学でソーラー・クッカーを見学する

三溪園訪問

大学食堂でお昼を食べた後、バスに乗って横浜市中区本牧三之谷の三溪園を訪れました。秋のシルバーウィーク後の平日のため空いていました。

三溪園は生糸貿易で財を成した原三溪(本名:富太郎)が、1906年(明治39年)自邸を公開したことにはじまる日本庭園で重要文化財に指定されています。広さ約175,000㎡(53,000坪)に及ぶ園内には、三溪により京都や鎌倉などから集められた17棟の歴史的建造物が散在しています。ボランティア3名の案内で3グループに分かれて見学しました。

特に印象に残ったのは1958年まで原家の私庭であった内苑にある臨春閣の景観です。数奇屋風書院造りの別荘建築で、京都の桂離宮と対比されるということです。

また、横笛庵という小さな草庵も見ました。建礼門院に仕えた「横笛」は「滝口入道」との悲恋の末、寺にこもり入道から送られて来た千束の恋文をもって己の像を作ったとされるのですが、その像がこの庵に安置されていました。しかし、第二次大戦中に消失してしまったそうです。このような話をボランティアから聞きながら三溪園をひと巡りして、3時半ごろ三溪園を後にしました。

今回、エコキャンパスでは自然エネルギーの上手な利用、そして三溪園では自然景観を配慮した建物づくりなど、自然とのかかわり方に思いをはせる旅になりました。(松田正敏)



臨春閣を遠望する参加者たち

リフレッシュした畑の学校と試食会

畑の学校は今年4月に組織的にリフレッシュして再スタートしました。府中市市民活動支援課発行の「府中市シニアガイドブック」でも紹介されています。当会が後援し、農園主から入園許可された者の入園組織を“畑の学校”と称し、農園主の指示・指導の下、会則に従い、共同耕作に励む団体として府中NPOボランティア活動センターに登録しました(登録番号1121)。



援農活動の一環・・・当会も後援

基本方針は、従前通り会則にうたい、①集団農場(共同耕作)方式、②循環型農業を目指す、③旬の作物を播種から収穫まで体験学習する。④収穫物はみんなで分けるとしています。

入園許可を得るには、学校に入り、会則を遵守することを必須条件とし、援農ボランティアをしているか、その意志をもって必要条件として援農ボランティア活動の一環と捉えています。それ故に当会が後援・サポートしている訳です。

昨年の経験と実績を踏まえ、会員は現在21名で最低月3回の登校日を決め、旬の野菜を栽培しています。

ジャガイモ、エダマメ、スイカ、カボチャ、インゲン、シュンギク、ニンジン、トウモロコシ、キュウリ、トマト、ナス等はほとんど収穫しました。



珍しい「皇帝ダリア」は「畑の学校」のシンボル？

残念ながら雨の「試食会」となってしまったが、みんな笑顔。

また、ゴーヤ、モロヘイヤ、ピーマン、シシトウ、オクラ、ミニトマト、モロッコインゲンが収穫最盛期を迎えました。ダイコン、キャベツ、サトイモ、ハクサイ、タマネギ、ネギ、ホウレンソウ、ワケギ、コマツナ等、秋冬用野菜を育てています。

何年作っていても、天候と人的ミスで失敗を経験します。しかし、これも勉強だと会員の力を信じて奮闘し、収穫までこぎ着けたときは、その出来栄を讃えあっています。

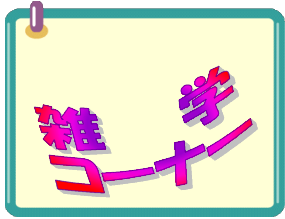
変わった作物として、皇帝ダリアを栽培しています。3メートル近くに伸び、11月上旬～12月初めに大きなピンクの花をつけます。期待してください。

今年も、現地でみんなで作った野菜を賞味する「試食会」を持とうと、スイカの熟度に合わせて、8月2日(日)に行いました。前日にエダマメ、トウモロコシ、トマト、スイカを収穫し、エダマメ、トウモロコシを茹でていただき、当日に持参してもらいました。近所の熊井さんに手伝っていただいたのです。

ところが、当日は朝から雨。参加者が少ないのではと不安でしたが、16名も集まりました。当会から借りたテントで雨を避け、スイカ、エダマメを賞味しながら賑やかに談笑できました。試みに市販のスイカを1個買い、食べ比べてみました。畑の学校のスイカが旨いと主張する人はいませんでした。スイカは種子、苗の段階で選別しなければならないので、市販のスイカの種子を持ち帰り、保存しています。

余談ですが、畑の学校の収穫物を持ち帰ると、我が家では食べきれないので、ご近所のマンション住民におすそ分けする機会が増え、コミュニケーションに役立っています。

(“畑の学校”長 竹田 勇)



府中多摩川 かぜのみち

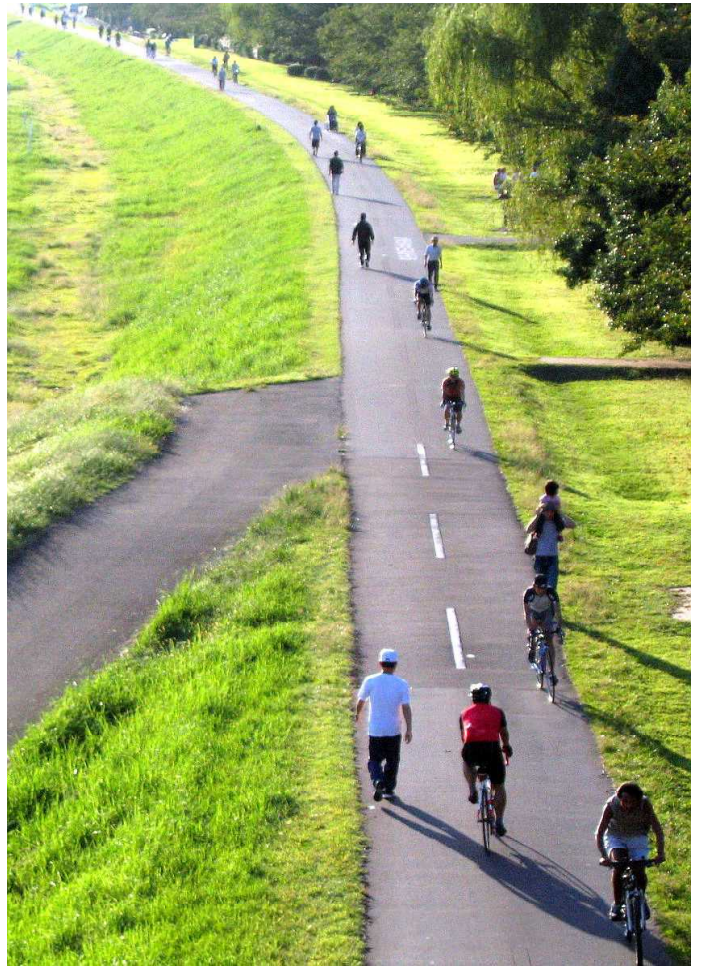
危険がいっぱい 人気のサイクリング道路

多摩川に沿って、下流の調布から上流の国立までの約10キロ。多摩川左岸の土手上的の道は「府中多摩川かぜのみち」と呼ばれています。多摩川を管理する国土交通省から借地している形のこの「道」は、多摩川河口の右岸側にある川崎の浮島から登戸へ、そして「水道橋」を左岸に渡って狛江、調布を経て府中へ。さらに国立、立川へと続く「多摩川サイクリング道路」の一部でもあります。

この「多摩川サイクリング道路」のなかでも「府中多摩川かぜのみち」は他の部分と比べて道幅や舗装状態が良く、自転車愛好家の間では「高速道路」と呼ばれています。

多摩川流域は人口密度が極めて高く、多くの人びとが多摩川の自然を求めて、この「府中多摩川かぜのみち」を利用しています。もちろん、ここはサイクリング道路といっても、歩行者優先なのですが、一部の自転車愛好家は「サイクリング道路」すなわち自転車優先と勘違いして暴走する結果、自損事故や歩行者をはねる事故も多発しています。

話は若干古いです。昨年5月のある新聞に「日本一のサイクリング道路を走る」という記事が載りました。読者にサイクリング道路の日本一を問うたもので、回答総数の22%にあたる4008人が選んだのは「年齢を問わず楽しめる『多摩川』が好きなサイクリングロードのトップに輝いた」という結果でした。



歩行者と自転車が入り乱れて利用している休日の「府中多摩川かぜのみち」

サイクリング道路日本一？。信じられない人も多いと思います。「しまなみ海道」や「びわ湖サイクルライン」をさしおいての結果ですから…。ここにはサイクリングに対する期待の違いが鮮明に出ているように思います。多摩川は日常的にサイクリングするところで、「しまなみ」や「びわ湖」は観光目的のあこがれのサイクリングルートなのです。アンケート結果は、如何に首都圏民が、身近なサイクリング環境を望んでいるかが明らかになったのですが、その場所は歩行者とシェアしなければならないごく日本的な「サイクリング道路」であるという点が問題なのです。

歩行者側も問題があります。野球少年団やシニヤグループも道幅いっぱい群がって歩いています。ペットのリードを長く伸ばして平気な人もいます。

このように「府中多摩川かぜのみち」はすでにオーバーユースであり、何らかの対策が必要です。

理想は、ドイツのように自転車と歩行者が接触しないように別の道に分けることです。これなどは広い河川敷を活用して、例えば自転車専用道を土手下の河川敷に移すことも考えられるでしょう。

緊急対策として府中市は年内にも、自転車が高速で走ることができないような仕掛けをサイクリング道路にしつらえるとしていますが、その事故防止効果は未知数です。

「サイクリング道路」なのに自転車が安心して走れない「道」。歩行者も自転車におびえながら利用しなければならない「道」。これが多摩川のもう一つの現実です。

(館 浩道)